

湧水 第十六号 令和七年六月 発行

湧水



千代田岳精会自作自詠俳句研修会

湧水第十六号目次 (五十音順)

作者俳号	名	頁
神田つねこ	(恒子)	1
近藤まき	(まき子)	2
座間萌泉	(文子)	3
徳本じゅんじ	(順治)	4

作者俳号	名	頁
橋本千舟	(隆一)	5
細川をさむ	(修)	6
前田道人	(道紀)	7

前田道人さんを偲んで 8

自作自詠俳句研修会 実施要領 9
自作自詠俳句研修会 役員 10

「秋彼岸」

神田つねこ（恒子）

軒氷柱解けて雫の光落つ
春雪や靴あと大小通学路
つばめ来て去年の泥巣を探し飛ぶ
同窓の友集ふ日や花の雨
文字摺の小花はピンクひだり巻き
花こぼれ茎だけ残り秋彼岸
秋の夜や許すかぎりの我の時間
吟終へて帰る路線や冬支度

「軽鳧の子」

近藤まき（まき子）

碧空に梢天つく冬木立
大なる来傾く屋根や春遠し
軽鳧の子の潜水二秒尾の見えて
今日行くか明日にしようか酷暑かな
祈ること多き日々なり残暑かな
お隣も隣も高齢敬老日
秋の夜は詰碁の夫の機嫌よし
山頭火歩いて来そうな時雨の夜

「街の灯」

座間萌泉（文子）

水浅き野川の岸や草萌ゆる
青空へ辛夷こぞりて天を指す
木の間より山藤滝のごと枝垂る
物陰に十薬ほのと花明かり
青紫蘇を刻めば匂ひ立つ厨
有り無しの風にさゆらぐ秋桜
七色の街の灯や初時雨
冬木の芽産毛纏ふて挙りけり

「余生」

徳本じゅんじ（順治）

余生なほ吟詠友の去年今年
嵩高に売場を占めてはうれん草
趣味の会終へて家路や菜種梅雨
曾孫抱き幸を祈るや菖蒲風呂
夏みかんたわわに実り空き家かな
昼下がり日課の如く西瓜喰ふ
長き夜の米寿の祝ひ続けをり
時雨るるや妻と二人のテイルーム

「卒寿」

橋本千舟（隆一）

喰積や余生を思ふ我卒寿

山里の入日は早しつばくらめ

船笛の重なる沖や春がすみ

明易や『日記俳句』の稿重ね

さび鮎や築にひと跳ね旅終はる

水切りの石の輪いくつ秋惜しむ

仕事終へ一服の茶や庭小春

軒氷柱鋸の荒齒とつらなれり

「西瓜」

細川をさむ（修）

家事終へて一服の茶や梅の花

山吹や八十路を越へし老ひならむ

噴水のしぶき七色夜の池

妻が好きな冷やし西瓜を供へけり

無人駅や妹迎へ来る秋彼岸

秋の夜奥の細道読みにけり

仕事終へ家路を急がん初時雨

火の気なき家は寂しや年の暮

「埋み火」

前田道人（道紀）

「自由律」不調和音の賀正では

苦節末自由律群叶ふなく

冬木立地上の修羅の吹き荒ぶ

西の風東の嵐猛けるまゝ

先人と呼ばれし人の迷い道

冬そうび風雪に耐え生きてみる

干魃に火事死神のおろろいて

直球が魔球でしたぞ語り草

前田道人（道紀）様を悼む

自作自詠俳句研修会
（五十音順）

もういちど師の吟聞きたし花の頃

神田つねこ

花冷えや俳句に生きて師は風に

近藤まき

春時雨亡き師の姿偲ぶかな

座間萌泉

熱爛や師を偲びつつ句作りす

徳本じゅんじ

天涯にひとときわ光る冬の星

橋本千舟

自由律も可とす師逝きて冴へ返る

細川をさむ

ご冥福をお祈り申し上げます

令和七年二月七日逝去 享年九十才

自作自詠俳句研修会 実施事項

※ 例会 毎月第二火曜日 午後二時より（原則として）

① 名句鑑賞・解説（当番制）

② 自作自詠

・ 自作俳句二句の紹介と一句自詠（独吟）

・ 俳友の感想、先生の句評

③ 自選一句（新聞俳壇等）、紹介と選者範吟・合吟

④ 翌月の兼題の選定

※ 行事 吟行会（原則年二回）、懇親会、その他

自作自詠俳句研修会 役員

参与

運営委員

顧問 前田道人

徳本じゅんじ

リーダー 橋本千舟

サブリーダー 細川をさむ

運営担当 近藤まき、座間萌泉

伴奏担当 神田つねこ、座間萌泉

編集担当 細川をさむ、近藤まき

神田つねこ、座間萌泉